

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

『私の研究—日本企業の海外進出の歴史と戦略』

丹野 勲

私は、本年 4 月、『日本企業の東南アジア進出のルートと戦略—戦前期南洋での国際経営と日本人移民の歴史』(同文館)という著書を出版した。この本は、私のライフワークである「日本企業の海外進出の歴史と戦略」研究の拙い成果の一つである。

この著書で、私は明治維新から戦前昭和期までの日本企業の東南アジア・南洋進出と国際経営、および南洋日本人移民の歴史について考察した。そして、日本企業の東南アジア進出のルートが、戦前期の南洋進出にあったことを明らかにした。日本企業は、戦前期においても、日本人南洋移民を伴い、外南洋と呼ばれていた東南アジア、および内南洋と呼ばれていた南洋群島という南洋において活発に国際経営を行っていた。地域的にも、東南アジアや南洋群島のみならず、オーストラリア、ニューカレドニア、パプアニューギニアにも日本人移民は進出していた。しかし、戦前期の日本企業の東南アジア・南洋進出は、サイパン等の南洋群島での拓殖事業、フィリピンのダバオでのマニラ麻栽培、マレー等でのゴム栽培と鉄鉱石開発が比較的知られているが、戦前期の南洋進出と国際経営の全貌についてはあまりわかっていなかった。この明治維新から戦前昭和期までの日本企業の東南アジア、南洋群島への進出と国際経営に関しては少数の研究を除いて、まだ未開拓の分野であった。この本では、戦前期の日本企業や日本人移民の東南アジア・南洋進出について、歴史、国際経営、移民論、南進論、経営史、貿易、経営戦略、地域研究、国際政治など多角的な視点か

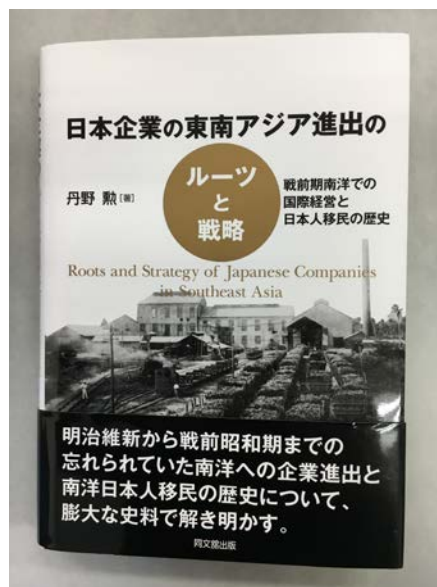
ら研究し、忘れられていた戦前期の日本企業の南洋進出と南洋日本人移民の歴史について明らかにしようとした。

本書を執筆して強く感じたのは、戦前期においても海外に目を向け、海外事業に取り組んだ意欲的な日本人が多くいて、現実に多くの海外投資をしたことである。その中には、南洋移民として行動する人もいた。起業家、行商、商人、貿易者、栽培者、職人、サービス等で海外に飛躍する者も多かった。私は、戦前期においても、海外に夢を求めた日本人のエネルギーを感じるのである。そして、日本は活発に国際経営を行っていたことを確信するようになった。

また、名の知れたまたは無名の南洋移民・南洋実業家当事者が記した記録・史料が想像以上に残されていることに気が付いた。このような埋もれていた史料をできるだけ掘り起こして、世に知らしめるのも本書の目的の1つであると考えている。当時は、国策ということもあり南洋関連の研究がかなり多かったというのも新たな発見であった。

現在、私は、この本では詳しく書くことができなかった南洋で活躍した日本人事業家・南洋移民に焦点を当てた本を執筆している。来年 3 月頃には出版予定である。今後とも、私のライフワークの1つである「日本企業の海外進出の歴史と戦略」研究に精進していきたい。

(所員/たんの・いさお)



国際経営研究所主催 公開講演会 3 開催報告
 講師：近藤光氏「チョコレートから見た持続可能な開発について」

杉田 弘也

6月13日、世界の子どもたちを児童労働から守るために活動している NGO、ACE ジャパンのガーナ・プロジェクト・マネジャー近藤光氏による公開講演会が開催された。

ILO のデータによれば、2013 年には全世界の子ども人口の 1/9 に当たる 1 億 6800 万人の、本来なら就学しているべき年齢の子どもたちが、児童労働を強いられている結果、教育の機会を奪われ、健全な身体の発達が損なわれ、有害で危険な作業に従事させられるなど搾取されている。また、日本のいわゆる「JK ビジネス」も児童労働にあたるとして、国連から勧告されている。

児童労働の 60%は、農林水産業に集中しており、児童労働の使用が疑われる産物としては、カカオ、コットン、コーヒー、紅茶など私たちになじみの多いものが多い。この講演会では、多くの人々に愛好されているチョコレートを題材に、児童労働そして先進国における消費の在り方について考えた。



2004 年の数字によれば、一人当たりのチョコレートの消費量で世界トップの座をドイツとスイスが競っており、日本は 19 位であるが、国別の消費ということになると、USA、ドイツ、UK、フランス、ブラジルに次いで第 6 位であり、世界有数の消費国といえる。またチョコレートの原材料であるカカオの生産量で世界第 1 位はコートジボワールであるが、日本で生産されるチョコレートの場合、77%がガーナ産である。

チョコレートの特徴は、原材料の生産地がアフリカ、中南米、東南アジアなど熱帯の途上国に集中している一方、生産過程や商品の性質から、加工と消費は涼しい先進国で行われていることである。さらにカカオの価格は、ニューヨークの先物市場で決定され上下変動が

大きい。100 円で売られている板チョコのうち、生産者に還元されるのはわずか 2.8 円であり、この結果ガーナでは 90 万人、コートジボワールでは 130 万人が児童労働を強いられている。

児童労働によって教育の機会を奪われることは、さらなる貧困へつながる。この悪循環を防ぐために、ACE ジャパンでは、①子どもの保護と就学の徹底、②学校現場の改善、③農家の収入向上、を目的としたプロジェクトを実施している。

そこで重要となるのは、先進国住民の消費行動であり、最低価格、プレミアム、長期的に安定した調達、生

産者への前払いなどを前提としたフェア・トレードに目を向ける必要がある。日本では価格が高いとみられがちなフェア・トレード商品であるが、欧米はもちろん日本でも大手企業でフェア・トレード商品を販売するところも出てきている。特にチョコレートの場合、廉価な板チョコは

採算に合わない、あるいは 2020 年にはカカオが不足するとの予測もある。私たちの消費行動も、アフリカや中南米、アジア・太平洋における児童労働を解消するために、そしてカカオとチョコレートの持続的な生産のために問われている。



(所員／すぎた・ひろや)



邂逅

一見、地味に見えるが、国の行く末を基本的に変えていく職業を持った、ヒトと出会い、お話を伺う機会が、この大学では少ない。

学生たちに、その場を創ってあげることも教員の仕事の一部かもしれない・・・と思っていたそのチャンスは、昨年の秋、研究室のパソコンに飛んだ。財務省関税局の事務官のに向けた国としての貿易・実体の指いたいとのことであった。

財務省の中でも素晴らしい経歴だ画調整室長の片岡拓史氏等と研究合ったのは、それから間もない日から関税委員会のメンバーとなるこのような出会いを経て、室長に「ールの策定・実施について」といを受けていただけることとなつてとしての持続的な経済発展へと深く結びつく基礎作りの部分であり、結果的に言えば、前年度の横浜税関の方々からの公開講演会に引き続いた内容となった。

税関からの統計資料を検討し、今後の検討課題を絞り込み、国の機関として企画立案し、税関やその他の関係機関の指導を行う財務省関税局とはどのようなものか、色々な観点からお話し頂いた。講演後、多数の質問を受け、その問いに対し、後日、回答を頂いた。



び込んできたメールから始方からで、内容は「将来に針について」参考意見を伺

ろうなと思わせる、関税企室でお会いし、色々話してであった。その後、財務省委嘱状を受けとった。

も「モノの流通に関するルータイトルで、講演の依頼た。これは日本が貿易立国

—————良き日の邂逅であった。

(所員/岡本 祥子)

【国際経営研究所からのお知らせ】

❁ 公開講演会開催

(2017 年度第 4 回目) 4 ページに詳細掲載
 日 時： 2017 年 10 月 12 日 (木) 9:20~10:50
 場 所： 湘南ひらつかキャンパス 1-250
 テーマ：“Being a Unique and Successful Entrepreneur”
 講 師： Prof. Tan Sri Dato’ Paduka Dr. Fng Ah Seng 氏

❁ 協力/後援行事

学内講演会
 (講演:平塚信用金庫) 11 月 17 日(金)開催予定

❁ 地域連携

平塚市産業活性化セミナー (第 13 回) 後援
 (2017.8.9)

❁ その他

- 国際経営研究所のパンフレットが新しくなりました。必要ございましたら国際経営研究所までご連絡下さい。
- 12 月 13 日 (水) 教授会終了後、国際経営研究所の所員会議を開催予定です。

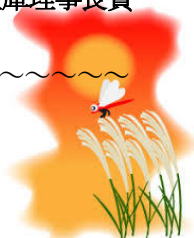
【第 12 回ビジネスプラン・コンテスト開催のお知らせ】

平成 29 年 10 月 21 日(土)神奈川大学経営学部主催・平塚信用金庫後援による第 12 回ビジネスプラン・コンテストが開催されました。今年度は例年より若干少ない 6 チームが参加となりましたが、コンテスト後には表彰式、懇親会が開かれ、積極的な意見交換が行われ本年度も盛況のうちに無事終了となりました。最優秀賞は④『メタボ撲滅プロジェクト』が選ばれました。結果は下記の通りです。

~~~~~出場チームおよび結果~~~~~

- ① 猫の手借りてみませんか? 奨励賞
- ② 20 年越しのサプライズ 優秀賞
- ③ モノ消費からコト消費へ
- ④ メタボ撲滅プロジェクト 最優秀賞
- ⑤ 平塚から世界へ 平塚信用金庫理事長賞
- ⑥ ima.com 奨励賞

~~~~~



国際経営研究所主催 公開講演会 4 開催報告
講師: Prof. Tan Sri Dato' Paduka Dr. Fng Ah Seng 氏

行本 勢基

今回、マレーシアより著名な起業家をお招きし、国際経営研究所主催の特別講演会を10月12日の1時間目、「ベンチャー論」の時間帯に開催致しました。講師の先生は、マレーシア国内でも有数の不動産開発企業を一代で築き、現在、国内第二位の勲章となる **Tang Sri Dato** を受けておられる中国系マレーシア人の方でした。



母子家庭で生まれ育ち、極貧時代を過ごした自身の幼少期を振り返りながら、「隣家から捨てられる残飯を食べながら生活を送っていた」というお話は、起業家としての原点になったと考えられます。その後、アメリカにわたり数年間の空軍生活を経た後に学士号を取得されました。マレーシアへ帰国後すぐに起業され、現在に至っていますが、その間、**MBA** や経営学博士号を取得されており、自らの起業経験を理論的に検証される姿は大変印象的でした。特別講演の中では、起業家とビジネ

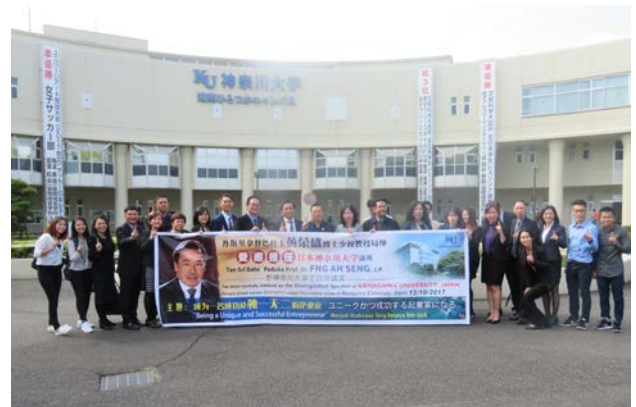


スマンの相違を強調され、どのような環境においても成功するためには人よりも何倍も働くこと、努力し続けることが重要であると指摘されていました。

英語による講演でしたが、多くの学生が情熱溢れるお話に引き込まれ、最後まで集中して受講しておりました。講演終了後には、有志の学生を中心に先生を囲み、更に議論が続きまして熱心な情報交換が行われました。このような機会を今後も設けることで本学部学生の起業家意識が喚起され、国際色豊かな学部になっていくことを切に願っております。

講演者の起業プロセスは、まさにマレーシアの経済成長と符合しており、大変臨場感のあるお話を頂くことが出来ました。

ご講演当日は、大橋経営学部長をはじめ、田中



則仁先生、泉水先生、アーマンハディ先生、昼食会には石積国際経営研究所所長にもお越し頂き、盛大な講演会になりました。この場をお借りして各先生方に深く御礼申し上げます。

(所員/ゆきもと・せいき)

編集後記

第55号をお届けします。今回は、自著紹介と3つの講演会報告を掲載するという、盛りだくさんの内容となりました。寄稿して下さいった皆さんに感謝いたします。これらの記事が、本研究所所員の皆さんの研究活動を一層活性化させる触媒となれば幸いです。Y